山桜会創立90周年に想う

東京山桜会 会長 三宅 彰

追手門学院校友会「山桜会」が本年創立90周年を迎えたことは、真に慶賀に堪えない。山桜会は追手門学院の前身である、明治21(1888)年創設の大阪偕行社附属小学校の同窓会が、その発足の日としている大正5(1916)年1月30日の「桜会」結成のときから数えて、90周年に当るというわけである。その桜会の結成をはじめ、それが昭和3(1928)年に母校創立40周年を期して山桜会の誕生となるまで、私学における同窓会の重要性を指摘しておられた校長の片桐武一郎先生のお骨折りに負うものであることを忘れてはならない。

片桐武一郎先生は大正2(1913)年5月に、当時の大阪偕行社社長(陸軍第四師団長)に乞われ、大阪市立道仁小学校教頭から転じて、大阪偕行社附属小学校第8代校長に着任され、昭和13(1938)年5月に辞任されるまでの1/4世紀にわたり名校長として指導に当られ、校名を世に高めたものであった。大正4(1915)年の校則改定により、学校設置当初は主に軍人の子弟の養成が建前であったものを、一般の児童も含めて小学校令に基づいた普通教育を施すこととし、校訓として「誠実」・「剛毅」・「自治」の三つを掲げて、片桐先生の教育理念を実践してこられたのであった。

私は昭和7(1932)年4月に大阪偕行社附属小学校に入学し、その後健康上の理由で一年余りは家に近い西宮市今津小学校に通学していたが、二年生の第3学期から偕行社附属小学校の原級に復帰して、昭和13(1938)年3月に同校を卒業しているので、丁度片桐校長の在職末期にその薫陶を受けたことになる。先生がスケールの大きな卓越した教育者であり、児童・保護者が心から信頼を寄せる人格者であったことは、小学生の頃から実感していたが、先生がまた管理者としても校内規則・体制の整備や施設・設備の充実などに優れた業績を挙げておられたこと等は、卒業後に理解できたことであった。昭和5(1930)年の校舎焼失後に、当時としては最新の設備を誇る校舎が再建されたが、私共は入学時からその恩恵に浴する最初の学年となったわけである。

着任初期には片桐校長の教育方針は偕行社本社から全幅の信頼を寄せられていたが、年月の経過と共に本社の責任者も交代し、世間の軍国主義化に伴って教育方針への批判も強まり、片桐校長の辞任に至ったことは、当時の歴史の推移からして避けられない事情であったとはいえ、母校にとって誠に不幸な次第であった。昭和20(1945)年8月の敗戦により、偕行社本社の解散は偕行社学院と改名していた母校の存続を揺るがし、廃校の危機に直面することになったが、当時の院長を始め多くの学院関係者による学校存続運動の結果、追手門学院として今日に至ることが出来たのは、戦前既に大阪府下第一の進学校としての名声が定着し、多数の有力な卒業生を世に送り出していた実績が評価されたものであろう。

ところで、「山桜会」の今日までの歴史も決して順風満帆ではなく、母校が追手門学院として再生する前後の中絶状態をはじめ、度々の休眠と復興を繰返してきたが、昭和32(1957)年に上田常隆会長(小24期卒)のもとで再発足し、翌年には「山桜会報」創刊号が発行されて、それが第77号の本号にまで至っている。同時期に、かねてから有志の集まりがあった東京で、緒方富雄会長(小25期卒)のもとに東京支部が発足し、昭和38(1963)年には東京山桜会と呼ぶようになった。私もその一人として総会に出席するようになったのが昭和44(1969)年頃からである。東京山桜会の発足に際しては、当時未だお元気であった片桐先生の在京者への呼び掛けに負うところが大きい。先生は毎年の総会に東京まで足を運んで下さっていたが、昭和48(1973)年10月病のため89歳で亡くなられた。東京山桜会は来年平成19(2007)年に第50回記念総会を迎えることになる。なお、東京山桜会の関連では、静岡支部が昭和63(1988)年に有馬良一支部長(小45期卒)のもとで発足し、12年間活動を続けられたが、平成12(2000)年にはその幕を閉じて東京山桜会へ吸収されることになった。

「山桜会」は追手門学院(その前身校を含む)卒業生の親睦団体であることは勿論であるが、同時に学院の後援団体であることを望まれて、母校創立90周年の昭和53(1978)年に同窓会から「校友会」に呼称変更したものである。度々の学院記念事業の時には協力を惜しまなかったし、最近は学院の教育支援にも積極的に関与するようになっている。私が在学した頃には小学校のみであったものが、今や学院は幼稚園から大学院までの総合学園となっている。同窓会としては学校毎の組織が母体となるのが自然であろうが、校友会としては幼稚園から大学までの卒業生全体の協力体制が欠かせない筈である。母校愛は卒業直後よりも、その後の他校出身者との交際を経験して強まることが多いようであるが、その母校愛が是非学院全体に向けて拡がるように望みたい。私のように東京からでは事の詳細はよく分からないが、もともと校友会山桜会の大学支部であった現在の大学校友会とは、さらに緊密な関係となり、互いに大きな力を発揮してもらいたいことを切に願うものである。総合学園としては世に種々のタイプが見られるが、幼稚園・小学校から大学・大学院までの一貫教育を目指すのが理想的であろう。これは在校生の純血主義を望む意味ではないが、総合学園の一部局のみが世間に喧伝されるのではなく、学院全体のレベルアップを期するのが本筋と思う。校友会「山桜会」は学院のそのような姿を目標に、創立90周年以後を視野に入れて行くべきものと考える。